

異世代で語る「まち」

区画整理によってできる 6 つのポケットパーク。順々に整備が進み、ついに最後の一つとなりました。最後のポケットパーク、ここでは、インターロッキングで画を描くということになり、ワークショップを行いました。

そこには小学生から町内会の重鎮まで、広い年代の住民が集まりました。

☆ワークショップの前に

何も手掛かりがない中でアイデアを出そうとしても難しいのでは？ということで、JR岡崎駅、羽根町の歴史をふりかえりました。市役所の方が明治 21 年から現在までの約 130 年をざっとかいつまんで紹介してくださいました。



☆時間を積み重ねて

重鎮の方々は「懐かしい」「それは知らなかった。生まれてなかったなあ。」などいろいろな思い出が頭の中を往来していたようです。その話を聞くだけでも興味深いものでした。鉄道省営のバスが日本で初めて走ったのが岡崎だった、昔走っていたチンチン電車にはドアがなく車両の横についている手すりにつかまって通勤する人もいたなど、貴重なお話が聞けました。

この話は何かの形で残しておかなくては、という気持ちになりました。今がこうしてあるのは、いろいろな先達のお陰なのだということを実感した時間でした。



☆未来へ向けて

その後、デザインのコンセプトを考えたのですが、大人は未来へ残していくものは、「時間を積み重ねて今がある」ことを伝えたいと考えました。6 つあるポケットパークに、時間の流れに沿った岡崎駅の乗り物を配置してはどうか？その中の今回のデザイン（順番でいくとチンチン電車になります）にしてはどうか？など根底にあるのは概ね同じ気持ちだったようです。

子どもは、地域の活性化に寄与するようなデザインがいいと名物をデザインしました。

大人も子どもも、地域への愛着やアイデンティティがしっかりと根付いていること、その想いを未来へ伝えたいという気持ちが伝わってきました。



☆異世代で語り合うことは、そこに住む人々の地域アイデンティティが強くなることを発見したワークショップでした。